

大阪ミツワ株式会社製造

OMV-24式自販機

製造期間

1995年1月～1998年11月

製造台数 約3000台

めん類自販機、トーストサンド等とメジャーな自動販売機に隠れてひっそりと姿を消した影の功労者。開発中に他社で同系統が販売されたり、利益的な問題で姿を消した機械。今追い求めても手に入らず、何も情報がないままその自販機が製造されたという事実と思い出だけが残る。

そんな自販機グルメの歴史の番外編として、特集される事の少ない「ランチボーイ」と「ぽてパリくん」を紹介してみました。関東ではすっかり姿を消したものの関西ではまだ現役に活躍している自販機なので、歴史を見て「ぽてパリくん」を発見し、貴方の小腹を満たして頂ければ幸いです。

- ランチボーイとぼてパリくんのひみつ1



時代は60年代、当時は国栄商事という名前で自動販売機の機器を製造していたグローリーに追随するように、新たな市場へと踏み切った企業「ミツワ電機工業」があった。

当初は塗装を中心に行っていたが事業の幅を広げ、Nikon等に代表されるカメラの金属パーツやスマートフォンなどの分野でも活躍し、現在では海外進出も行っている。そんなミツワが動き出したのは1988年のこと、会社が大きくなるにつれ分社化を行い自動販売機などを製造する部門を「大阪ミツワ」として自動販売機事業に乗り出していく。

記憶に新しいところで、焼き肉店や麻雀店などで今も活動しているガムの卓上自販機やカロリーメイト等も同時に発売出来るガムベンダー等は、薬局の店頭などでよく見かけたものだった。2004年に元の「ミツワ電機工業」と合併してからはすっかり姿を隠してしまったものの、金属成形に長けた会社だからこそ出来るオリジナル自販機が多数製造されていた。

今回紹介する自販機はその中の一つ「ランチボーイ」だ。この自販機が製造されたのは、消費税が導入されてから数年後の1995年の事。

- ランチボーイとぼてパリくんのひみつ2

複数の箱モノが販売できたガムベンダーの応用により、ボタンを押すと駆動モーターが作動し、弁当箱が下に落下する方式で電気代も抑えられるコストパフォーマンスに特化した自動販売機。

発熱ユニットの入った容器の紐を引っ張って数分待てば、熱々のランチが食べられる。発熱剤で温める方式の歴史は意外と古く、駅弁などの他に需要が高かったのがプッシュ式で温まる熱燗。それからキャンプ用品や非常食と今でも色んな場面で活躍を続けていて、顧客としても単純で分かりやすい。



こ、これは、大ヒットやで!

とばかりに、大阪ミツワは発熱剤で温まる弁当自販機「ランチボーイ」の製造を急いだ。発熱ユニットのコスト面費用はかかるが、電子レンジも不要でスマートな形状のこの自販機は未来を感じさせた。

冷凍食品の躍進、という心配はあったもののコストパフォーマンスとスリム形状が受けランチボーイはそこそこの注文数を記録・・・しかし、1995年の1月。関西を未曾有の大震災が襲う。死者は約6千人に負傷者4万人、という戦後としては最大の震災に日本中は混乱し、大阪ミツワも被

- ランチボーイとぼてパリくんのひみつ3-

害を受け、ランチボーイの出足も遅れる事になった。

震災も落ち着いてきた春。

100円ベンダーとしても有名なティーヴァイフーズ等が中心となり、ようやくランチボーイはガムベンダー等と並んで様々な場所に設置された。

期待を込めた新自販機に、大阪ミツワは震災への復興に繋がる予感を感じていく。遅れはあったものの、93年の自販機設置基準の改定のせいで置く事を諦めた店舗などの需要を開拓し、ランチボーイは3,156台という生産数を数えるヒット商品となった。

当初は3商品しか収納出来なかったものの、やがて改良されると共に「2倍の6種類」とセット出来る弁当に幅が増え「ミニレストラン」等の愛称で呼ばれるようになっていく。何しろ電子レンジを搭載していないため電力量を格段に抑え、奥行57cmに150kg程という一般的な自販機と比べても半分程度の大きさを実現していた。

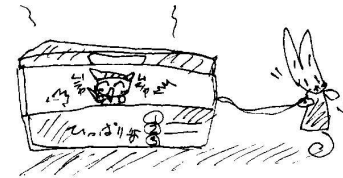
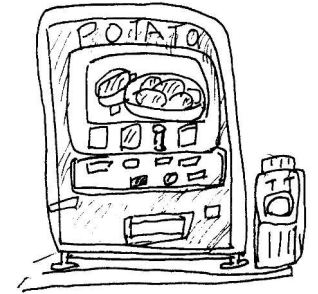
が、ランチボーイが作られる前に、自動販売機の老舗富士電機は「電子レンジ内蔵型の冷凍自販機」を完成させ、電子レンジ本体の解凍技術の向上によりコストパフォーマンスも抑えられるようになり、1994年には初の電子レンジ用フライ食品を「ヒチレイフーズ」が発売開始。

- ランチボーイとぼてパリくんのひみつ4-

ランチボーイの他社類似品ナショナル製Heat&Eat等までも出回った。

時代は高価な発熱剤での弁当から、レンジアップで温める弁当へと急速に切り替わっていく。

追い打ちをかけるかのようにランチボーイに悲劇が襲う。93年に起こったコメ騒動により、日本全国で米が手に入らず政府は緊急的に外国米を輸入し市場にタイ米があふれた。それらは95年になっても市場を制圧し続け、ランチボーイの肝心の中身の「ヒッパリーナ弁当」にまでタイ米が使用された。

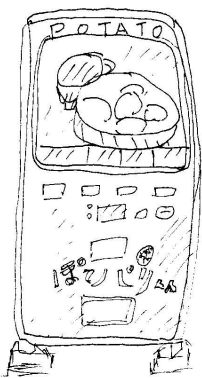


1つ500円以上という高価な弁当の中身が、それはもう日本人には口に合わないタイ米だったため「ランチボーイ」は悪名高い自販機として敬遠されるようになる。

さらに老舗「冷凍食品自販機」が市場に出回り、ランチボーイの居場所は次々に奪われ、ついに1998年11月、ランチボーイの製造は中止となった。

が、ランチボーイの弁当の悪評は付きまとったものの、自販機としてはパフォーマンスとスリムを兼ね備えサイズが合う箱であれば何でも自販機に入れられる!

- ランチボーイとぽてパリくんのひみつ5-



という、現代技術の粋を集めたかのような最強のマシーンだったため、外装をリペイントされ、「ポテぱりくん」という名前でお菓子の自販機として生まれ変わった。

3種類から6種類の商品を納める事が出来て電力量も安くて薄型の自販機だ。同系サイズの箱を用意するという手間はかかったものの、ティーヴァイフーズを中心に「ポテぱりくん」として生まれ変わったランチボーイは、人々の小腹を潤していった。

その後、大阪ミツワは2004年に合併し「ミツワ電気工業」に戻る事になり、自動販売機の事業からも段々と手を引くようになっていく。

メンテナンスをされる事が出来なくなった「ポテぱりくん」は非稼働となり、今では西日本の一部の地域などでしか姿を見せなくなった。

近年ではティーヴァイフーズも「CandyStore」という、缶飲料とお菓子の複合自販機を展開させるようになり「ポテぱりくん」の役目は終えようとしている。

CandyStoreの自販機を見るたびにふと思い描く、ポテぱりくんの小さなボディと出てきた箱のわくわく感を味あわせてくれる自販機にもう一度会いたいと。



あ と が き



今回の歴史製作に当たり、株式会社ミツワ電気工業のご担当者様とミトミ様にご協力と監修をして頂きました。お忙しい中資料や相談にも乗って下さるなど、企業としての姿勢や豊富な知識には非常に驚かされるばかりです。私たちのような小さなサークルにまで助力を差し伸べて下さった事への深い感謝と、御社の発展を心から願います。ご協力ありがとうございました！

- 参考資料 -

美味しんぼ49巻/やさしい電気と制御の基礎知識/やさしい物づくりの基礎/富士電機社史/富士電機技報
よくわかる電機業界/日本懐かし自販機大全/自動販売機の文化史
- 協力- よっしーさん/間藤さん/ちゃれんじさん

- 資料提供 -

株式会社ミツワ電気工業様/株式会社ミトミ様

製 作

<http://irupa-na.repadars.org/>